

GR
白雲郷

納
經
塔

と
り
お

54

昭和58年4月17日

埼玉 名栗

宗教法人
白雲山

鳥居観音



表紙解説

納経塔内部に祀られる釈迦如来像

木彫金箔仕上げ、総高二、五米

昭和四十八年十一月祭祀

鳥居観音の納経塔です。

お山の大観音の脇下の面白岩の上に建立され昭和四十八年に落慶をみました。

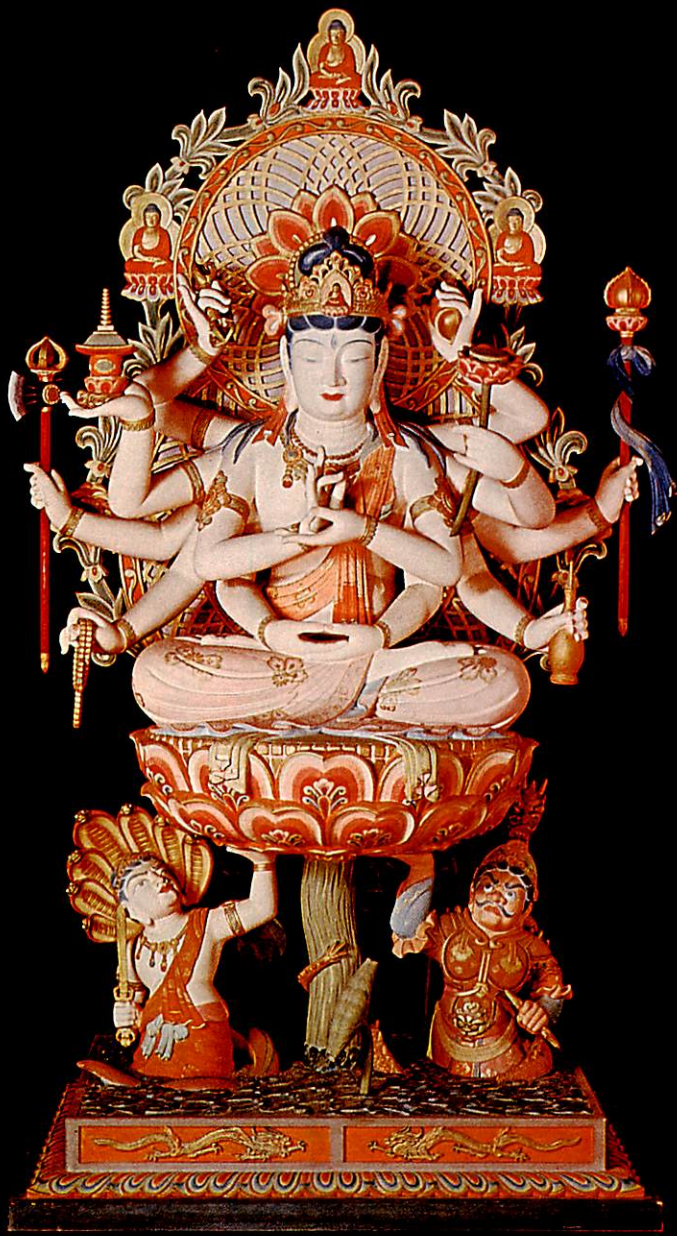
この塔は今から二千年前「アフガニスタン」や「バキスタン」地区に於て数百年の間、佛教が殷盛を極めた「ガンダーラ」の遺跡から掘り出されたものを原形として考案されたもので、日本では珍らしい美しい建物です。

内部には獅子を台座とした金箔の印度式釈迦如来が祀られ、写経十万部が奉納できま

す。
昨春秋、納経一万巻達成の奉讃法要が営まりましたが、一万体観音等の供養のためにと発願された納経が、一万体観音の満願と時を同じゅうして一万巻を成就したことは、奇しき因縁とも申せましょう。

コンクリート造り、総高十五米

昭和四十八年十一月一日落慶



切り取ってご使用ください。

ジュン ティ カン ノン
准 胝 観 音

口 絵 解 説

鳥居観音のご本堂に祀つられている七観音の中の一尊像で、「准胝観音」さまと申されます。

「准胝」とは心性の清らかさを讃歎して名づけられたもので、三十三通りにも身姿を変えられた観音さまの中で、ひとり女性のお姿をされて、救児、延命、除災のためお出まされたと言われています。

このお像を刻まれた平沼先生は、准胝さまの清らかなご心性を佛面に出されるのに、大変苦心された模様ですが、常に亡き母に見守られ、導かれ、出来上ったお顔の相には、母の幻影が現われているといわれます。

昭和三五年、開祖平沼弥太郎作

木彫 総高一、五米

とりゐ 目 次 第54号

表紙	①納経塔	
表紙裏	②表紙解説	
口 絵	③本堂に祭祀の准胝観音 <small>リツシテイカンシ</small>	
口絵裏	④口絵解説	
一万体観音満願奉讃法要を終えて	鳥居観音	尾尻 天外……………二
納経一万巻達成		
道光禪師ご法話(其三六)		……………四
禅のはなし(其 四)	大本山総持寺 前副監院	佐藤 俊明……………八
西 遊 記(其四七)		……………十二
一万体観音奉安報告		……………十八
写経奉納報告		……………十九
寄 進 報 告		……………十九
鳥居観音だより		……………二十
裏表紙裏 寺域案内図		
裏表紙 これからの行事		

願成 満達 音卷 親一万 体納 一万 奉讃法要を終えて

香 語

(前略) 鳥居観音ノ靈境タル、

開祖平沼桐江居士、慈母ノ遺志ヲ
繼承シテ観音堂ヲ建シ、仏菩薩

鳥 居 観 音
尾 尻 天 外

秋季大祭に併せて、一万体観音の満願と、納経一万巻達
成の奉讃法要が厳修されました。

夜来の小雨にけむった山頭に、朝から踵を接しての参拜
者。関西、東北からのお詣りもあって、八〇〇人を越える
賑わいとなりました。

供養幡も多くさんのご奉納が頂戴できました。

参道に巾狭く樹てられた千数百本の供養幡は見事にお山
の荘厳となりました。

雨に洗われた山頂の大観音のご尊像も、ひときわ鮮かで
心なしかその眼差しは微笑んでおられました。

村内梅花講中の奉詠する優しい流れにさそわれて、隣峰
寺院の随喜の読経、僧に続いて堂内を一巡される人の眼に
入る万灯のあかしは、さながら浄土のみ灯しかと思われた
何というありがたいご縁をお作り下さったものであろう
か……合掌されての平沼さまご夫妻のお面差しは仏さま
の化身のように窺えたと、多くさんのお便りが寄せられま
した。

ヲ彫祀シタル孝心ニ
幾十年仏刻ヲ重ネ、諸堂塔ヲ造立
シ万福ヲ莊嚴スルニ從ヒ、コノ行
ヲ独リ悲母ノ供養ニ留メズ、博ク
有縁無縁ノ者ヲシテ普ク仏徳ニ浴
セシメント志シ、一万体観音ノ奉
安ヲ発願シ、納経ヲ勸メテ先祖ガ
菩提ニ資セシメントス。

江湖漸ク風聞ヲ作シ、(中略)

此ノ法縁ニ寄ル篤信者ノ善根、既
ニコノ地ニ充滿、ココニ一万体満
願ヲ成就ス。

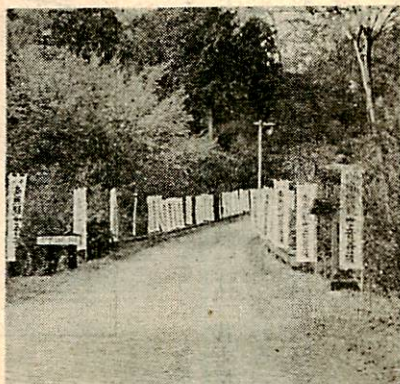
施主ガ先亡ノ幾十億霊、観音ニ一
座シ法悦ニ安ンズ。

発願主、開祖ノ浄業、施主崇祖ノ
至心、マコト功德無量ナリ。

(以下略)

お祀りされた一万体観音の白無垢のお姿は児孫の祈りを
表象するかのように、尊く美しく、幾十億とも知れないご
先祖のみ霊が、観音のみ座に安らいでおられることを、昇
る香煙の中に立って、ひしひしと感ぜられたことでありま
した。

開祖ご夫妻の聖業、余多お施主の善根の功德は、このお
山の老杉と共に、いよいよ深まってゆくこととございまし
よう。 合掌 (法要のご報告本紙二〇頁〜二三頁)



参道の供養幡



道光禪師ご法話

(故高階瓏仙貌下)

光明の生活・心光の生活

(其三六)

一、反物豎糸

お釈迦さまが、お説きになったものを、みなお経と申しておりますが、それはどういうわけかといいますと、お経の経の字は、たとえば皆さんが着ていられる、衣服の反物のたて糸のことでありまして、これは織りはじめから織りあげまで、一貫して変わらぬものであります。

ご承知のように、一反の反物でいえば、横糸を織っていく間に、いろいろと取りかえて、白でも黒でも変わりますが、豎の糸ははじめから、一貫して変

わらないものであります。そのように、お釈迦さまのお説きになった「真理の仏教」は、昔も将来も、また国が変わり聞く人が違っても、変わるものない道をお説きになってあるから、反物の豎糸にたとえて、尊んでお経と申しております。

二、因果の道理

それでは、昔も今も将来にも通じて変わらぬ道とはどんなことをいいますかといえますと、それはいろいろのことがあります、そのなかの一つに、因果という大切な道理があります。

これはすべて世のなかのことは、原因と結果から、成っているということであり、その因とはたとえば草木の種のこと、種があつて芽がはえて

花が咲き実を結ぶ、その実が結果であります。

この結果が原因（種）となり、この種が芽を出すには、いろいろな力がそなわらなければなりません。豆の種でいえば、袋に入れて三年置いても芽は出ませんが、それを大地におろすと土やら、水やら、肥料やら、太陽やらが、力をそえて芽が萌えて延びていく。その力となるものを縁といいます。その種と縁とをのぞめて因縁といい種と実をのぞめて因果といいます。またこういうものを物質因果というのであります。

しかるに形がないものでも、この道理で支配されているのが因果律ということであって、仏教の教えは、この因果の道理の上に立てられております。

それで道元禪師の仰せに

「因果亡じて空しからんがときは、諸仏の出世あるべからず、祖師の西来あるべからず」と、曹洞宗の修証義に見えております。

これは世に因果の道理がなかったなら、仏祖も祖師も世に出て「遷善改悪」とか「転迷開悟」を教え

る必要はないということです。

すなわち神さまが世界をつくったり、人間をつくらうというようなことでは、道理に合わぬということでありませぬ。

三、目に見えぬ業の力

その原因となるものを、人間界で業といいますが、業という字は、私の家業、あるいは営業の業という字で、それを仏教では業と読ましてあります。すなわち「わざ」とか「うごき」とかいうことであって、身ですることが身の業、口でいうことが口の業、意で思うことが意の業といひまして、これを仏教では通常「身口意の三業」と申しております。

そこで、これが善いことに動くのを善業といい、悪い向きに動くのを悪業といいます。これが善と悪との原因となつて、果報を受けるのであります。すなわち善悪因果の道理でありましてそういうのを「業力」因果と申します。

しかるに、その三業のなかでは、意業が本になつ

て、口のものいいとなり、身の行ないとなりますから、その意業が悪念を起こせば、口業も身業も、悪業に動きますから、人は常にこの意業を淨く持つて、口も身も善業に動いて、それを原因として善い果報を将来にまねくようにしなければなりません。その意業を淨くするところに仏教の信仰が必要となるのであります。

心光の生活

信という字は宗教の生命で、同時に人間処世に大切な字であります。それで私は「三信訓」というのを選定しております。

一、信光は照心の光明

一、信念は処世の勇氣

一、信用は無形の財宝

というのであります。その

第一は、仏教のなかでも、特に禪の立場からは、人々の心を持つ仏心の光明を開くことであります。

世の多くの人は、自分の心に、ほんらい本心とし

て、もっていきすりっぱな仏心を見失って、闇であることに気がつかず、おれが心はおれが知っていると頑ばるのであります。その実、人間の心の本体を知っている人は少ないのです。おれが心と思つてゐるが、それは仏心の光がかくれた、闇の心の動きをつかまえて、それが自分の本心だと思ひこんでいるのですが、それは自我心であります。いまもいうように、この自我心は闇の心の姿であつて、本心はその奥に（仮りに奥という）潜在している、いわゆる清淨無垢の仏心、または仏性であります。

その仏心はいうがごとく清く、明るく、そして美徳に輝く清淨無垢なものであることを、經典には「汚泥に汚れぬ蓮華」といつてあります。それにいつとはなしに錆がついて、その錆に覆われて、その仏心の光も力も、とぎされて闇のままの心で動くようになつてゐる、その心が自我という根性であります。それが通常凡人の心境であります。それを仏教で無明の煩惱といいます。その無明の煩惱心には、いつからなつたか、それは初めがわからないから無

始の無明と云つてあります。今世に始まったことではなく、過去の過去から、生まれかわりつつ、永い間のことでありますから、無明長夜とも喩えてあります。長い間仏心の光を見失つて、闇の光の生活をしてきていますから、その闇を破つて、仏心の光と力で動く、つまり、仏心の光明生活に還元させる教化が仏教であります。

醍醐天皇の御製といわれているものに

長き夜の 闇き心に しるべせよ

なお残りけり法のともし火

というのがあります。なおのこりけりとは、釈迦滅後二千年以上だが、その教が残っているのだから、その法の燈火で、心の闇を照らし、明るい仏心生活に目覚めよという、指導の御製であります。そうなることを心光の生活と題しました。

その闇を晴らした仏心の生活から、人間の幸福も招来する。こうした教えが正法と云つて、正しい宗教の信仰であります。

闇の心の主動性よりする闇の生活は、自我が中心

でありますから、すべて利己主義が先となります。つまり自己満足の利己主義を先とする、欲望の闘争生活となつて、そこに動物的性格があらわれて、親子でも、兄弟でも、夫婦でも、親類でも、況んや他人とはなおさら睨み合い、うばい合いをして、あさましい修羅道の罪業生活を演出しているのが、心の光明を失っている世間の姿であります。

禅のはなし

其四

大本山総持寺

前副監院 佐藤俊明

まだ抱いてたのか

原坦山はらたんざんといえは明治時代の有名な禅僧であり、また、東京帝国大学（いまの東京大学）に開設されたインド哲学の初代講師、学士院会員に選出された仏教学者でもある。明治二十五年（一八九二年）、七十四歳でこの世を去ったが、死期を前日に予知し、瞑目二十分前、知己朋友にハガキを出し、

「拙者即刻臨終仕り候。この段御通知に及び候」

と報じ、従容じょうようとして坐定ざじやうしたという話は



有名だが、若いころから異彩を放っていた。

行雲流水の旅に出ていた若いころ、同参（同期生）の親しい友と田圃道を歩いていたら、小川に出くわした。川幅はひろくもなく、水も深くはないが、橋がな



いので徒渉するほかない。

ふとみると、妙齡の乙女が川を渡りかねて困っている様子。

坦山は、

「どれ、拙僧が渡してあげよう。さァ、しっかりわしの肩につかまりなさい。いいかね」

と、いいながら、軽々と娘を抱きあげて川を渡してやった。

娘がまっかな顔をしながらお礼をいうのも耳にかけず、さっさと立ち去って道友のあとを追った。

やがて半里（二キロ）も来たころ、それまでふきげんそうに黙々として歩いてきた道友が、どうにもがまんならんという風に、ぶっきらぼうに言った。

「お前は実にけしからん。出家の身として、若い女を抱くという法があるか！」



えらいけんまくである。

坦山は、とぼけた顔をして、あたりを見まわし、

「なに、女どこにいるんだ」

「とぼけるナ。さっき、きれいな娘を抱いたじゃないか」



「ワッハッハ……なんだ、あの女のことか。おれは川を渡して、おろしたよ。お前はあれからずーと、まだ抱いていたのか」

これにはさすがの道友も二の句がつけなかった。

シャッターを切れば必ずフィルムを巻きあげるのが撮影の常道。巻きあげないと二重写しになるからである。時々刻々に移り変わる周囲の動きに応じ、心のフィルムの巻きあげを忘れてはならない。



西遊記

(其四七)



三王子

法師達は、ようやく天竺の国の一地方、玉華県に
つきました。唐の都、長安をでてから、かぞえてち
ょうど十四年め。思えば、長いつらい旅でした。

「おししょうさま、旅も、これでおしまいです。さ
ぞ、おつかれだったでございましょう。」

悟空は、こういって、白馬の上にゆられて三
蔵法師を見あげました。

「悟空よ、あんしんするのは、まだはやい。天竺の
国についたといっても、お釈迦さまのお寺、雷音寺
までは、まだまだ遠いのだ。経文をこの手にしっか
りにぎるまで、けっしてゆだんはできないよ。」と法
師はいいました。

玉華県の国王は、法師たちを城の中にむかえいれ
ましたが、悟空や八戒や悟浄のものすごい顔を見る
と、びっくりしてしまいました。

「おどろくことはありません。みんなわたしのし
で、ずっとここままで、ともをしてきた者です。みに
くい顔のわりあい、心はうつくしくて、わたしの
ために、よくはたらいてくれました。」と、法師は、
三人のほうをむいて、わらいながらいいました。

「はあ、それはそれは。」

国王は、こうこたえましたが、きみわるいのはお
なじことでした。

「みんなおかしい怪物だが、わるいことはしないか
な。どうも気になる。」と、小声でいいました。

国王には、三人の王子がありました。国王のこ
とばをきくと、かんがえこんでしまいました。

「ごもつともです。ああいう怪物が、あべれたり、
人をこまらせたりするものです。どうでしょう。三
人の怪物どもの力を、ためしてみましょか。」と、だ
い一の王子がいました。

「それがいいでしょう。こんなときに、じぶんのう
でまえがわかると思います。」と、だい二の王子もい
いました。

「さんせい。やりましょう。」と、だい三の王子は、
うでをたたきました。

だい一の王子は、ふとい棒を持ち、だい二の王子
は、八戒とおなじようなまぐわを持ち、だい三の王
子は、黒いびかびかの棒をかかえて、

「怪物ども、法師のしとはうそであるう。正体を
あらわせ。」と叫びながら、おどりこみました。

「これこれ、なにをいうのか。おししようさまので
しでなければ、いっしょにここへくるわけがあるま
い。おまえたちこそなに者だ。」と、悟空は、いいか
えしました。

「なに者だとはなんだ。われわれはこの国の王子
だ。ぶれいなやつ。」と、だい一の王子は、いきなり
悟空にうちかかりました。悟空は、ぱっと身をかわ
し、指さきでかるく王子をつきとばしました。

「うるさい人だな。そんな棒よりも、このほうが、

ちつとは役にたちますぞ。」

耳から如意棒をとりだして、三メートルほどの長
さにのぼし、どんと、土につきたてました。

「王子さまとおっしゃいましたな。いかがです。こ
の棒をぬぎとることができますか。」

「こんなもの、わけないことだ。できないでどうす
る。」

だい一の王子は、如意棒をかかえて、

「うーん。」と、力いっぱいひっぱりました。ところ
が、棒は根がはえたように、びくともしません。う
ーん、うーんとうなる王子の顔は、赤くなるばかり
でした。

だい二の王子は、まぐわをふるって、八戒にむか
っていききました。しかし、八戒はへいきです。

「へろへろまぐわをひっこめる。これがほんとのま
ぐわというものだ。」と、八戒が、まぐわをぶーんと
ふると、金色の光がとびました。だい二の王子は、
思わず目をおさえてにげだしました。

だい三の王子の黒い棒は、悟浄の手で、はるか遠



くへはねとばされてしまいました。

「はははは。そんなことでおどろくのははやい。わしの武術を見せてやろうか。えいっ。」

悟空は、空へとびあがり、如意棒をのぼしたり、ちぢめたり、ふしぎな力を、つぎつぎと見せました。右に左に車のようにふりまわし、高くなげると、ざざっと、雨がふりだしました。

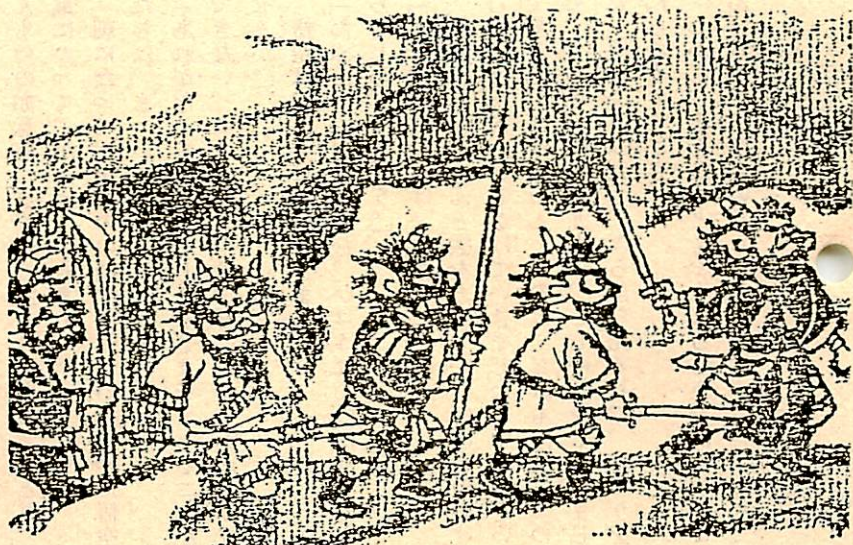
「わしもやるぞ。」と、八戒も、悟空とおなじように空へまいあがり、まぐわをふりまわしました。びゅうびゅうとものすごい音がして、あらしのような風がふきだしました。

悟浄も、まけてはいません。宝じょうをやっとつきだし、えいっとひいて、空をかけめぐりました。

三人の王子は、心から感心して、

「おそれいました。あなたがたのようにつよい方を見たことはありません。ところで、わたしたち三人のきょうだいは、武芸がなによりすきです。どうか、でしにしてくださいませんか。」

「よろしい。でしにしてやろう。」といって、むねを



はったのは、八戒です。

「さてさて。おししょうさまにうかがってからでないと、うかつなへんじはできないぞ。」

悟空は、八戒をしっかりとつけておいて、法師にそう
だんしました。

「国王は、わたしたちをだいにしてくれました。その
礼にも、王子たちののぞみを、かなえてあげなくては
なるまい。」と、法師は、かんがえぶかげにい
ました。

その日、町のかじ屋が城へきました。王子のたの
みで、如意棒や、まぐわや、宝じょうとおなじもの
をつくるためだったのです。おなじものをつくら
ず、おなじようにつよくなるうというのでした。

城には、トンテンカン、トンテンカんと、鉄をう
つ音が、たえまなくひびき、ふいごの音が一日じゅ
うきこえました。

ところが、夜ふけのことでした。城から七十里ほ
どはなれた山にすむばけものが、風にのって城へや
つてきました。だれも見えていないのをさいわい、ほ

んものの如意棒、まぐわ、宝じょうをぬすみとり、
風にのって、かえっていききました。

朝になって、宝もののぬすまれたのを知った悟空
たちは、まっかになっておこりました。

「あれがなくてはおししょうさまをまもることが
できない。ぬすんだやつは、どこにいるかわかりま
せんか。」

悟空は、王子たちにききました。

「たぶん、山おくにすむ、ひょうばんのぼけものた
ちのしわざでしょう。」

「よし、八戒つづけ。悟浄もこい。」

悟空たちは、きんと雲をとぼして、ぼけものす
む山のほら穴へおしかけていききました。中をのぞい
て見ると、ぼけものというのは、どれもけだもの
で、まんなかにいる九人は、ししの顔をしていまし
た。毛をふりみだし、ざらざら光る目で、あたりを
にらむものすごさ。

しかし、そんなことをおそれる悟空ではありません
。八戒、悟浄もいっしょなので、すごいげんきで

す。

「けだもののぼけものども、武器をとりもどしにき
たぞ。」と、どっとせめこみ、かたっぱしから、な
ぐりつけました。

ししたちもよくたたかいましたが、悟空には、毛
をぬいてにせ悟空をつくるという、おくの手があり
ます。このたたかいても、千びぎあまりのにせ悟空
をつくって、あばれさせました。これでは、ぼけも
のたちも、かつことはできません。

てしたのけだものたちも、さるにひっかかれ、な
ぐられ、けられ、うちたおされました。とうとう大
将分の九人のししのぼけものは、いけどりにされて
しまいました。

「こんなわる者は、ころしてしましましょう。」

八戒は、いちばんおこっていました。それという
のも、たたかいたのために、一枚しかないだいな着
物を、ずたずたにひきさかれてしまったからです。

しかし、天上から、星の神さま、太乙救苦天尊が
おりてきて、ぼけものいのちごいをしました。

「八戒よ、着物は玉華国の国王にもらつてやる。きょうのところは、それでがまんしてやってくれ。この者どもは、もとわたしのけらいだった。下界へおりて、わるいいたずらをしたけれど、これからはけつしてさせぬ。だから、ゆるしてやつてはくれまいか。」

天尊が、ばけものにちかづいて、まじないをとなえると、ばけものは、たちまち、ほんとうのししになつてしまいました。天尊は、いちばん大きなししの背にまたがつて、

「いけ。」と、一声。

五色の雲のまいおりる空を、ししはまっしぐらに、空へのぼっていききました。

国王と三人の王子は、悟空たちのはたらきを見たので、いよいよ感心しました。

「もし、できることなら、いつまでもここにいて、王子たちに武芸をおしえてやっていただきたいが、いかがでしょう。」と国王はいいました。

「せっかくだが、そうしてはいられません。われわ

れは、ばけものたいじがしごとではないのです。おししようさまをまもつて、一日もはやく、経文を手にいれるところまでいかなくはなりません。それまでは、どこまででもいくのが、われわれのつとめです。」と、悟空がいました。

「では、しかたがありません。」

国王は、たくさんの金銀を、お礼にといつてだしました。しかし、悟空は、手もふれません。

「わたしたちは、出家です。金銀は、いりません。」

「そうですとも。」

そばから、八戒が口をはさみました。

(以下次号に続く)

観音

奉安者芳名

自 五七・一〇
至 五八・二
敬称略

数	住所	芳名	数	住所	芳名	数	住所	芳名
三	千代田区	荻原 寛子	一	文京区	甘利 道子	一	青梅市	松本 よし
一	荒川区	鶴田はる子	一	板橋区	西谷みね子	一	所沢市	齊藤 まつ
一	千葉県	伊藤とよ子	二	杉並区	岩崎 喜代	二	千葉市	井田 純
一	同	高橋 きぬ	一	大田区	荒井 久子	一	板橋区	鈴木 文蔵
一	岩手県	関 テツ	一	新宿区	原 清人	一	本表計	
一	入間市	沢田 正	一	同	村田 キヨ	一	施主	三三名
一	秩父市	松本忠太郎	二	越生町	新井 タネ	二	奉安数	三八体
一	名栗村	横田 一郎	一	調布市	齊藤 道代	一	総合計	
一	金沢市	南 英子	二	横浜市	新田 勉	二	施主	四、〇一三名
一	世田谷区	吉池喜代子	一	新潟市	藤本 よね	一	奉安数	一〇、〇二二体
一	浦和市	井上 静江	一	練馬区	菊地 喜三	一	施主	四、〇一三名
一	坂戸市	弓削田正雄	一	渋谷区	永井 きよ	一	奉安数	一〇、〇二二体
一	川崎市	堺 綾子	一	大田区	吉本 勘市	一	施主	四、〇一三名
一	武蔵野市	木崎 栄子	一	立川市	横溝 千代	一	奉安数	一〇、〇二二体
一			一	東村山市	大木 良作	一		

お誘い

昨年秋の満願法要には、大勢さまのお詣りを戴き、ありがとうございます。

満願後も、皆さんのご要望により引き続きお申込みをお受けいたしております。

お関係の向きなど、よろしくお勧め戴きたく、お願い申し上げます。

※一体につき、二万円

※電話にても、お受けいたします。

電話

〇四二九七九〇四一七



写経奉納者芳名

自五七・一〇
至五八・二〇 敬称略

数	住所	芳名	数	住所	芳名
一〇〇	川島町	関 八朗	一	新宿区	平城 きく
一	所沢市	幸田 吉彦	一	豊島区	長 哲郎
二	和光市	松田 義春	一	同	石村 清子
一〇	練馬区	平沼 とみ	一	品川区	大原りつ子
二	飯能市	武末 夏子	二	杉並区	野崎 直澄
一	世田谷区	高田与志子	二	千代田区	荻原 寛子
一	同	高田 京子	一	浦和市	井上 静江
一	港区	片岡 あや	二	入間市	吉田紀美子
二	府中市	岡田 歳子	本表計		
一	品川区	南川志げ子	施主	二二名	
一	杉並区	長田喜美子	奉納数	一三六卷	
一	同	柘植美智子	総合計		
一	世田谷区	吉村 外子	施主	三、一五六名	
一	同	大越 タイ	奉納数	一一、七四八卷	

寄進

敬称略

一、本堂及び大観音堂内
鑿子、木魚用金欄座布団

寄進者 入間市 吉田 紀美子

一、庫裡座敷ジュータン新調

寄進者 入間市 吉田 健

一、庫裡用座布団カバー一二〇枚

寄進者 入間市 吉田 紀美子

同 同 相内 文一

同 同 生方 重子

同 同 有島 杉光

同 同 有島 杉光

鳥居観音だより

十月



秋は実りの季節。

稲田には黄金の波がうち、五穀豊かに果実は成熟し人はその味覚に恵まれて健やかに成長できます。

鳥居の仏さまも、来月いよいよ一万体観音の満願が結実することになりました。

庫裡は満願大法要の準備のために、村内役員の応援を得ながらの大忙し。

案内先施主名簿の点検整備から案内状五〇〇〇通の発送、参拝者出欠の員数点検、奉納金の受付記録供養幡、記念品、印刷物等の諸打合せ、特に供養幡の申込みが案内状発送後旬日ならない内に既に五〇〇本を越える勢に事務局は感激、幡への施主名の書きいれに、夜の作業が続きました。

十一月

○秋季大祭

一万体観音満願 奉 讃 法 要

納経一万巻達成

十一月十七日、法要直前に奉納された一万体観音によって、見事満願の成就となりました。

はかったことでもない、この奇しき達成に、人の力を超えたご因縁の尊さを、しみじみ感じたこととございます。

法要は本堂での秋季例法要から始まりましたが、満堂の参拝者に、開祖平沼先生の歎びと謝意が陳べられました。

「永い生涯の中で、これ程無心に歎べたことは嘗てない……偏えにみ仏の加護と、寄せられた皆さんの善根の賜ものである……」と。

謝し終って涙された先生のご心中には、亡母の深い恩愛の忝けなさと、とみ夫人の内助の力を折り重ねておられたこととございましょう。



山頂の大観音の行事は、雨を気遣って急遽堂内での法要に切りかえられました。

ところ狭さはありませんでしたが、読経する僧に続いて供えられた万灯の灯しの中を巡堂していただいた皆さんには、ご先祖と共に心ろから法悦に安んじていただけたことかと思えます。

大勢さまのご参拝を戴き、盛大に厳修できましたことを、厚く御礼申し上げます。

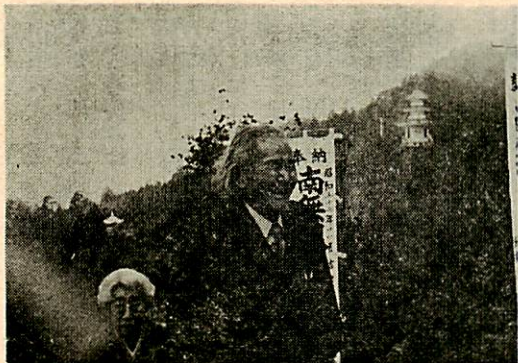
追って、案内状が町名、地番変更、移転等のため六百通以上の返戻がありました。ご諒承賜わりたいと存じます。



敬そかに仰がれる
大観音三像



夢幻に煙る鳥居観音



法要日のスナップ

大観音に拝登された開祖ご夫妻

開祖と川越講元原田氏

早朝から次ぎつぎに参拝された方々
 混雑した受付前で久々のお話し合いの一つ時



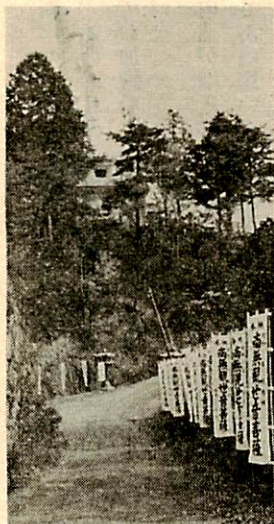


開祖と静岡清水市講元松田氏

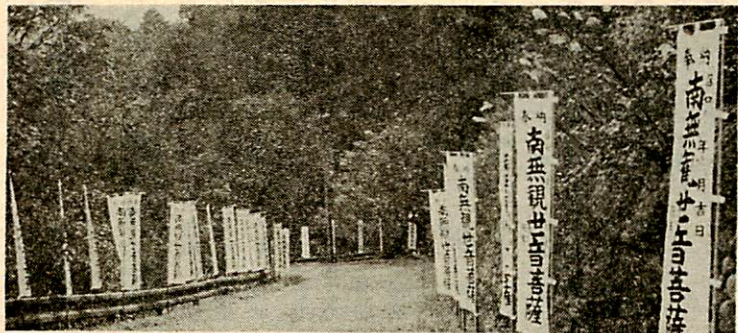


開祖と所沢講元小山氏

大観音下の供養幡



参道に樹てられた供養幡
お山は見事に荘厳される



十二月。



この月に入ると、夜毎の星に輝が増します。

スッカリ葉を落した樹々の細い梢への先に寶石をまき散らしたような一面の星空を眺めながら、仏のまします「須弥山」^{シュミセン}はあのアたりかと思うことであります。

高さ五十六万キロ、月までの距離を遙かに超え、頂上は逆三角形に無限に広がり、人間の住む現世はその南のはるか麓の小さな地域にあると説かれています。そんな夢のような遠い人間の現世に、観音さまはお出まし下さって、苦しむ者をお救い下さいます。

今月は新年のお札の準備で、庫裡^{クラ}はお札の山になります。このお札はそのまま観音さまのおん身代りとしてお加護をいただきたいものでございます。

年々お申込が増えてまいります。

講元皆さんの篤いご協賛を深く御礼申し上げます。

元旦祈禱お札受付名簿

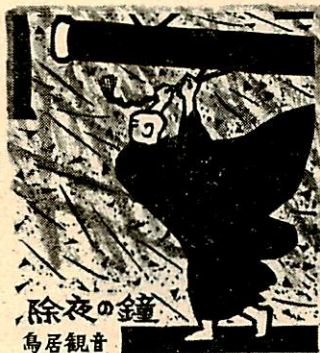
敬称略

数	住所	講元世話人名	数	住所	講元世話人名
四	台東区	清野 福松	四	川崎市	吉田 一男
八	名栗村	小林 昭三	五	東大和市	清水 健生
〃	〃	岡部 光佑	二	名栗村	佐野 正助
六	三鷹市	松井 吉雄	二	〃	吉田仙太郎
一	八名栗村	原田 良藏	八	所沢市	小山権之丞
一	〃	町田 要一	一	川越市	原田 愛助
四	狭山市	井上 竹吉	一	町田市	細見 富雄
一	飯能市	横川 一郎	一〇	鳩山町	大和拓友会
二	与野市	井上 正雄	一	東松山市	関口 喜作
一	三鷹市	本村 その	五	越生町	小森 茂
八	坂戸市	若松 志津	一	七名栗村	矢島 武一
九	名栗村	平沼 幸一	五	入間市	中村 敏三
一	四入間市	吉田 健	九	江東区	川倉 輝雄
一	八名栗村	岡部 静吉	一	浦和市	藤沢 輝雄
三	飯能市	町田 良平	一	五名栗村	岡部 安一
一	三名栗村	浅見 義一	二	〃	野本 栄治

数	住所	講元世話人名
九	名栗村	浅見 光雄
五	練馬区	保田 静江
四	浦和市	岩井 良太
一〇	世田谷区	新妻 宏充
三二	飯能市	武居 藤吉
一三	名栗村	岡部仲治郎
八	世田谷区	高田 精作
五	飯能市	平沼 玉枝
一四	名栗村	町田 延行
一五	川越市	斉藤 恒作
五	板橋区	郡司 伸孝
四五二	与野市	埼玉トヨベ トヨベト コロナ会
九九	〃	畑 くに
一六	越生町	榎本みや子
九	板橋区	滝田 トキ
八四	大泉学園	
合計	一、七三七札	
数	住所	講元世話人名
一〇	名栗村	浅見達次郎
六	狭山市	六本木初代
二一	青梅市	小峰 久治
八	〃	清水 勝
七	名栗村	松下 愛吉
一二	〃	金子 仙吉
四五	朝霞市	広瀬 秀雄
八	板橋区	植村 秀三
一五	名栗村	石井芳次郎
四	千代田区	荻原 寛子
一〇	飯能市	渋谷 文造
九	足立区	日本電装 足立営業所
二八四	〃	右他一九八名

○除夜の鐘

諸行無常
是生滅法
生滅々已
寂滅為楽



時は瞬時に過ぎ去り、万物は一つ時として同じところにとどまっていない。この常ない一瞬一瞬の連続によって万物は実のり、人間も生かされていることを思うと、今現在の一期を如何に貴重なものとして用うるかに心を致さねばなりません。

祇園精舎の鐘の音は、私と共にこのことを教え、撞く人、聞く人の苦難を払う功德のあったことも伝えられております。

夜十一時本堂での報恩法要を済ませ、十二時からの除夜の鐘には所沢方面からの参拝もありました。



元旦を迎えると、身も心も清々しい。

大みそかの、それも除夜の鐘の音に向って、せわしく高まっていった世間の物音が、この朝ばかりは申し合せたでもしたかのようになり、いっせいにひそまって明ける。動から静への移りかわりが、幾度び繰り返されても、爽やかに、しかもつつしみ深く迎えられる。

今年（辛酉）は、十干と十二支の組み合わせられたもので、六十年に一回同じものがめぐってまいりますが、本年は特に十干の最後の癸と十二支の最後の亥の組み合わせで、過去六十年の総決算といえます。癸はこれまで隠されて見えなかつた善いこと、悪いことが、はっきり現われ、善いことが纏まれば一掃するといいい、その反対に筋道が乱れ騒が起きると、その文字も逆になって、百性一掃などと申しまゝす。亥は何ものかをほらみ、しかも大変な力を生み出す強大なエネルギー核ということを示します。

道をあやまれば大変な騒動が起き、正道を守り行えば、明るい前途が迎えられると教えておられます。

○元旦祈禱会

村内寺院の随喜をいただき、厳かに修行。後刻庫裡で祝杯をかたむけ、雑煮が接待されて、賀詞交換ができました。

川越講中原田さまご一行、斉藤さまご一行、立川市小林さまご家族、鳩山町関口さまご一行、飯能市平沼さまご家族、細田さま、入間市六本木さま、名栗村役員さま等、例年ご定連のご参拝でありました。

招待された日航機で伊勢神宮、出雲大社等から参拝されたの積み重ねの土の影を映した。その時の心境を映した。昔、平沼先生が招かれた日航機で伊勢神宮、出雲大社等から参拝されたの積み重ねの土の影を映した。その時の心境を映した。



木彫30cm 昭39
平沼先生作

二月



鳥居観音の梅は、紅梅もヤット一輪二輪。

庫裡脇の福寿草も、まだ雪に隠れています。その名から延命幸運の縁起につながって、新年を祝う花として賞美されてきました。

地に低く

しあわせありと福寿草

○二月三日 節分豆まき

良い春を迎えるため、立春の前日、節分の夜に、悪疫を追い払うてまいりました。

昔は宮中での「追儺式」として、公の行事でありましたが、次第に一般の家庭でも行われるようになり、夕方頃からあちこちで豆まきの大きな声の聞こえて来たことが懐かしく思い出されますが、この頃ではその声も遠慮勝に聞こえたり、聞えなかったりするようになりました。

わが声の

ふと父に似て疫はらい

○初午 稲荷まつり

庫裡裏の山に、お稲荷さまが祀られています。古くからの平沼家の五穀豊穰を祈った祭神さまで、稲生の意から、正しくは「稲荷大明神」と申されます。狐を祀っていると思われ勝であります。狐はお稲荷さんの使者で、油揚げをお供えするのは、使者にお願いごとを托するための、おん礼の習わしであります。

鳥居観音では例年この日、幟りを樹てて、お山の平安をお祈りしております。

インドの陀神，ナーガス像



高さ30cm 昭33
平沼先生作

○これからの行事

○五月八日 花まつり(月おくれ)

お釈迦さまのお誕生日、花み堂をつくり、甘茶を接待してお祝いします。

○七月十日 四万六千日

この日にお詣りすると、四万六千日お詣りしたと同じご利益りやくが戴けるといわれます。

○七月十六日 卒塔婆施餓鬼供養

午後二時、山頂の大観音堂内に於て行われます。塔婆は法要の後、堂外に建てられ、お先祖さまや、観音さまの、おもりをしていただきます。

○八月十六日 流灯施餓鬼供養(月おくれ)

午後四時本堂で法要、夕刻より灯籠ながし、打上げ花火、盆踊りなど。年々盛んになり、遠来の団体が増えてきました。

手づからお流しになられては、いかがでしょう。

七月半から当日まで受付いたします。

「○○家先祖代々」など適宜、お申込み(電話も可)下さい。電話○四二九七一九一○四一七番

供養料 一灯に付 千五百円也

近隣お誘い合せ、ご参拝お待ちしております。

○九月二十三日 秋彼岸法要

○十月二十日～十一月末 紅葉まつり

十一月上旬の紅葉は格別で、全山参拝者で賑わいます。

○十一月十七日 秋季例法要

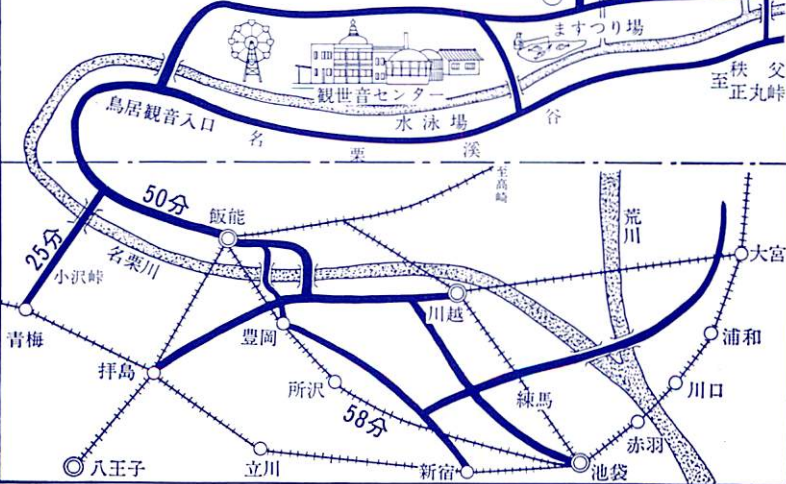
紅葉も最盛りで、一般の参拝者も多く、殊更の、賑わいであろうかと、心ろのはづむことでもあります。

とりゐ 第五四号 発行日 昭和五十八年四月十七日
発行人 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 平沼 宏之
印刷所 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社
発行所 鳥居観音 電話 ○四二九七一九一○四一七

白雲山 鳥居観音 観世音センター案内図



駐車場



夏と秋の行事

- 塔 婆 供 養 7月16日 午後2時

- 灯 籠 な が し 8月16日午後4時～9時
千数百の流れる灯籠船、打ち上げ花火、夢幻の一つ
時です

- 紅 葉 ま つ り 10月20日～11月末
紅葉に頬が染まり、大観音からの眺望は絶景です

- 秋 季 例 法 要 11月17日10時半より

- 常時供養、祈禱申し受けております
ご先祖、水子供養
家内安全、商売繁昌、交通安全、安産、厄除けなど